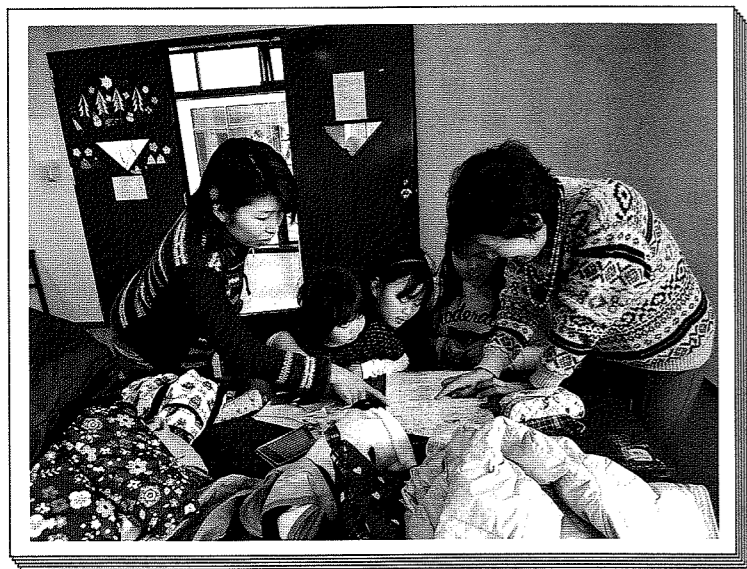


はじける こころ

vol.34



東図書館うきうき広場にて
「この問題、こう考えたらできるよ。」

げんげのとは：れんげ草が生い茂った草原のこと。れんげ草は、茎が地に臥して広がり、春になると蓮の花に似た小花を咲かせます。また、れんげ草は緑肥として大地を肥やします。蓮に似た小さなれんげ草を、子どもたち一人ひとりの尊厳に見立てて、それが一面に花開く様子をイメージしました



東図書館うきうき広場にて
「立体もおれるようになりました。」



被災地のためにしたことで、 心に残っていることはありますか？

- 募金をしたことで被災地の人たちの役に立つことができた。緑の羽根の募金もしたことがあったけれど、今回は重みがあった。被災地が一分でも一秒でも早く復興してほしいと思い活動した。
- 被災地の人に起こった津波とかのことを思いながら募金活動をした。
- 防災についての紙芝居をパワーポイントでつくった。防災のことは自分に関係ないと思っている主人公に、実際に地震が起きる話。いつ起こるか分からないから人ごとにしてはいけないという話。自分たちも3・11のことを忘れないようにしようと思うし、人ごとにするのはよくないということを考えてほしいと思っている。

3月11日の大震災から2年が たちました。どんなことを考えましたか？

- 黙とうしながら、悲しい気持ちだった。
- 奇跡の一本松というニュースを見て、東北の人たちがまだ希望を捨てていないのを感じた。
- 東北の人たちは支援金などをもらっているから、絶対に何年後か何十年後に絶対に立ち上がれると思った。

震災の取り組みをして自分が変わったなと感じたこと

- 人のことを思う力が強くなった。遠くの人のことをよく思うから、人のことをよく思うようになった。
- 友達だちがいなくなるか分からないし、だから、いる友達を大切にしようと思った。

なんで遠くの知らない人のことを、 考えられるようになったの？

- 同じ人間だから。自分たちだけ幸せで東北の人たちだけいろいろなことがむちゃくちゃなままの町に住んでいていいのかなと考えるようになった。

箕面市立萱野小学校の4年生は、「かやの防災センターをつくろう ～大切な命をまもるために～」というテーマで人権総合学習の取り組みを進めてきました。東日本大震災のこと、阪神淡路大震災のことを学ぶことをとおして、「自分たちには何ができるのか」を考えてきた子どもたちに、インタビューしました。

これからできそうな「こんなこと」

- 家族で避難する時の待ち合わせ場所を決めておいたら、ばらばらになった時も会える可能性が高くなる。そういう話をした。
- 家族に話をして、僕は妹がいるから、先に迎えに行つてそこが避難所になっているから、学校も避難所になっているから、そこで絶対に会えるようにしようと思った。
- 水やカップ麺やお菓子や乾パンなど防災の非常食をお母さんが買った。

お話を聞いて

山北 智 (箕面市人権教育研究会/萱野小学校)

今回のインタビューで印象的だったのは、「震災支援(支援というのも、違うのかもしれませんが...)」といったときに、ものやお金を届けるのではなく(それももちろん必要ですが)、「自分たちがいつまでも忘れないこと」というメッセージを子どもたちがしっかりと受け取り、「今の自分たちには何ができるのだろう」としっかりと自分たちの生活とつなげて、震災・防災のことを考えることができたということです。

「自分には何ができるのか」ということは、この先、年齢や状況とともに変化していきます。「いつまでも忘れない」ということは、よく言われることですが、大変難しいことでもあります。今の決意をしっかりと持ち続けてほしいと願うとともに、わたし自身も考え続けたいと思いました。

特集1	「学ぶ・語る・つながる」	第二中学校 KIZUNA塾	… 1 P
特集2	「部落問題学習に取り組む上で大切にしたいこと」	… 3 P	… 3 P
連載	・知ってる？市民のちから	東図書館うきうきひろば	… 4 P
	・わたしの人権教育	彩都の丘学園 神原 里恵さん	… 5 P
	・司書さんのおすすめ本	『ちいさな労働者 写真家 ルイス・ハインの目がとらえた子どもたち』 羽深 希代子さん(箕面市立第六中学校)	… 5 P
	・考えてみよう「てんやわんやのがーやがや」	かわのひでたださん	… 6 P
	・聴かせてよ「子どもの気持ち」～防災教育に取り組んで～		… 7 P

人権教育推進会議情報誌 『はじける ころろ』

発行 箕面市人権教育推進会議
箕面市教育委員会

人権教育課 TEL 072-724-6921 FAX 072-724-6010

e-mail : eduinken@maple.city.minoh.lg.jp

平成25年(2013年)3月

人権教育推進会議委員



八木晃介、河野秀忠、宮本美能、永田千砂、松岡淑子、井原芳朗、安東由紀子、上田晃江、尾上和美、中野淳子、主原照昌、笹内房子、岸本ミヨネ、中西庸介、山北 智、森崎直幸

「はじけるころろ」は教職員・PTA運営委員に配布しています。また公共施設にもおいています。
公開ホームページ : <http://www.city.minoh.lg.jp/eduinken/jinken/jinken.html>

「学ぶ・語る・つながる」 第二中学校 K-INUNA塾



新箕面市人権教育基本方針では「教職員どうしのつながり」の項目で「子どもの成長についてビジョンとプランを共有し」、「教職員どうしがより一層つながる」取り組み重要性や取り組み例を示しています。教育現場ではよく聞かれるフレーズですが、これほど重要で、だからこそ難しいことが他にあるのでしょうか。

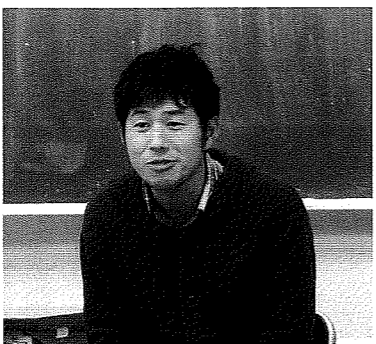
今回の特集では、第二中学校の教職員を中心に行われている学習会「K-INUNA塾」を取材しました。

「K-INUNA塾」は第二中学校教諭の田淵さん、西川さんが発起人となり、今年で2年目を迎える自主的な学習会です。開催回数は約2年間で28回と精力的に活動されています。

毎回すべての職員に呼びかけ、参加できる人が参加するというスタイルなので、参加者はその会によって違いますが、毎回、8〜12名の参加があり、様々な内容で学習会を行っています。

今回、取材させていただいたの

クラスを持ったからには一國一城の主で、だれにも負けたくないというのがスタートだったと思います。今は、結果的に全員オッケーだったらいいのかなというように思えるようになりました。



自分が抱えているしんどさを、暴力や荒れという形で外に出せない子、一見何も問題がなくても、心配な子がいることに気づけるようになってきました。見えなかったものが見えると、できていないことが増えてきている気がして、教職員の仕事って難しいとか、自分の力でどこまでできるのかなということを思うようになりました。50代の自分を思ったときに、今までは違うものがないと、子どもと関係をつくれないういづのを感じています。

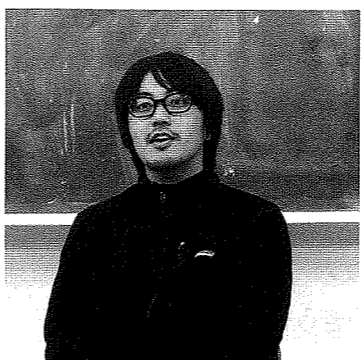
(二中の第一印象は?)

子どもたちが本当に子どもらしいと感じました。それから、職員室の雰囲気も学年ごとに違うように感じて、「ここでやっていくのかなあ」という不安もありました。

(二中の取り組みについて)

感じていることは?

いいなあと思っているのは班活動です。お弁当を中3の子が男女で席をつけて食べているのは他の学校ではめずらしいと思います。6人の班のメンバーで順に書いて回していく「班ノート」の内容も、学年が上がるにつれて深い内容を書けるようになり、子どもの成長が感じられます。そう



いったことを周りの子や本人も実感していて、全校・全クラスで取り組むことで、効果が出ているのだと思います。

(取り組みの改善点は?)

特色ある取り組みが多く、しんどいこともあるけれど、意味があるから続いているのだと思います。今が完璧と考えずにもっとよくしたいなあと思っ取り組みたいですね。

今年度の体育祭では地域連携のプログラム内容を大きく変えました。それまでやっていたから続けるのではなく、なぜするのか、それを子どもたちが理解しているかを意識してやっていきたいと思えます。

(二中で働いて、自分が変わったことや学んだことは?)

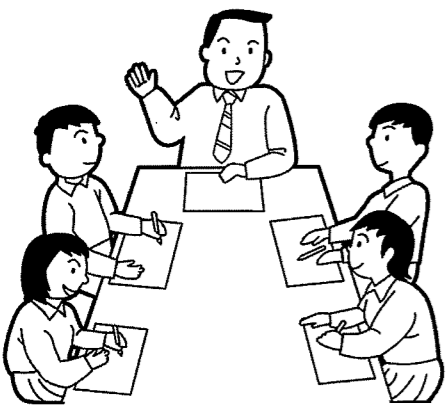
みんなでやるという体制を徹底できているのが二中のすごいところだと思えます。学校はチームだということを学びました。

(これからの目標は?)

自分にはできないこと、キャラを活かしてできることを求めるのではなく、だれでも実践できる取り組みを、高いレベルでできる教師になりたいと思います。

もうすぐ中学3年生を送り出すそうとしていますが、子どもたちにつけられた力を考えると反省する点も多くあります。そのことを踏まえて次の1年生に対して授業を頑張りたいです。

職員室で、子どものいいところを話したいです。クラスの子どものこといい話を聞くと自分も励みにもなります。



田淵さんにお聞きしました

☆他にどのような活動をされていますか。

カンボジアの地雷問題、部落差別、東日本大震災といったテーマで外部講師や教材資料から学び考えることや、仲間づくりや人権に関するワークショップ体験、進路指導などの授業体験等いろいろな内容で行っています。参加者の声から企画したもの、参加者が模擬授業の授業者となるものなど、学ぶ人と教える人が固定化してないのが特徴です。

☆運営する立場としての問題意識を教えてください。

人権意識や授業技術を高め続けることは、経験を問わず全ての世代の教職員に必要なことですが、経験がある世代が、若い世代へ継承すべきことも多くあると思います。また、教職員が世代を超えてつながることで、学校として人権教育を進めることができるようになります。そういったことが自然にできて、「来てよかった」と思える学習会ができればと考えて進めています。

…活動を取材して…

中堅教職員のホンを語る聴くという機会となりました。時の流れとは全く離れた聖域に子どもたちや先生はいるわけではないのでめざしたい教職員像や学校・子ども像と実像との間で揺れや気づきや自信を聞かせていただく機会となりました。あらためて、日常の子どもたち保

護者・地域とのからみあいの中で学校がつくられていることを実感できました。学校を地域に開く。地域が学校を育てていくことの意味を深めていくこと。協働して実践をしていくことの必要を痛感しました。井原芳朗 (人権教育推進会議 委員)

部落問題学習に取り組み上で 人権教育推進会議 学習会より

大切にしたいこと

今年、箕面市人権宣言から20年の節目の年にあたります。残念なことに、箕面市内において、結婚差別や土地差別、差別発言などのいんげんを否定するところがまだまだ起きています。

市民対象の意識調査では、回答した3人に1人が、自分の子が被差別部落出身者との結婚を望んだ場合に「反対する」と答えています。

このような社会を生きる子どもたちに、何をどのように伝えていくことが必要なのでしょう。

今回、人権教育推進会議のメンバーに市内教職員を交え、「部落問題学習に取り組む上で大切にしたいこと」をテーマに学習会を実施しました。

この内容をきっかけに学校、PTAご家庭などでも、部落問題について、本音で語ってみませんか？



子どもたちにつけたい力

- ・当事者との出会い、つながりから共感が生まれる。それが差別を乗り越える力になると思う。多様な人とながら、関係を深めることが必要。
- ・差別やいやなことに「それはおかしい」と子どもたち自身が疑問を持てる力や、異議申し立てできる力が必要。

指導にあたって

- ・悲惨さではなく、文化や社会への貢献など前向きにとりこまれる視点から考えさせたい。
- ・人権問題の解決や将来の展望を考える授業展開にしたい。

教える側の認識

- ・部落「問題」というのが、部落にルーツがあること自体が問題なのではなく、周りの人たちと、当事者の意識の差が問題を生んでいる。周りの人をどう変えるかにこそ教育の可能性がある。
- ・分からないことを分かったようには言いにくいし、先生も分からないから一緒に考えようかというスタンスも大事なのでは。自分自身が部落問題に向き合っているかを考えないといけない。
- ・「青い目 茶色い目」というNHKで放送された番組がある。差別心が簡単につくられることが分かる内容。何度見ても興味深い。

他の人権問題との関連

- ・差別をなくしていくためには関係の見直しが必要。障害の有無にかかわらず、関係をつくっていく支援教育は、今後の人権教育の骨子になると思う。
- ・人権教育の基本は自分を好きになること。自分を好きになれ

たら人も好きになれる。それが人権教育の基礎だと思う。

教材

- ・社会科の歴史や公民の教科書や、副読本「わたしたちのまち箕面」に載っている地域学習をしっかりとやるのが大事。
- ・「とりあいじゃんけん」という教材には「部落」という言葉は一切出てこないが、部落問題と共通する不合理さを感じられる。そういった視点を持って指導の系統性を持たせたい。
- ・「えんがちよ」というばい菌「このようなものや、かくれんぼおじいちゃん」という遊びに見られる排除の概念は部落差別に通じるもの。差別は人為的でなく、自然発生的にできるという発想で授業を展開できないか。



知っている？ 市民のちから 「つながりを紡ぐ安心空間」

東図書館「うきうきひろば」



新箕面市人権教育基本方針の「市民との協働による人権教育」を進めるにあたり、市内で活動する市民や団体を紹介する「コーナー」第3回目となる今回は、東生涯学習センターで行われている、「うきうきひろば」の様子を取材しました。

「うきうきひろば」と子どもに誘われたら、必ず「誰か一緒じゃない？」と他の子に呼びかけます。そうやって子どもたちがつながっていくように心がけています。「と穏やかに語る森田さん、今から8年前、うきうきひろばの立ち上げに関わり、今も代表として活動されています。

森さんは昭和61年から東図書館でお話会をしていた仲間とともに「東図書館うきうきひろばの会」を立ち上げました。うきうきひろばは、東図書館で遊んだり学習したりできる「居場所」として、土曜日や長期休暇中に年間40日ほど開かれており、多い日で50人程度の利用があります。また、同様の取り組みが西南図書館でも行われています。

おしゃべりを楽しく「サザ」の敷かれ

た一角で本やマンガを読む子、集まっておもちゃで遊ぶ子、机で宿題をする子と、それぞれ慣れた雰囲気の中で過ごしています。一番人気は折り紙だそうです。取材当日も2人の女の子がスタッフに教えてもらいながら、多くのパーツを組み合わせて立体作品をつくっていました。

夏休みなどの長期休暇中は利用が多く、宿題とおにぎりやパンなどのお弁当を持って午前10時から午後5時までうきうき広場で過ごすという「サザ」もいるとのこと。宿題が分からなければ友だちやスタッフの方に聞くこともでき、ひと区切りしたら友だちと遊べるのも魅力となっています。お父さん、お母さん、祖父母と来て一緒に過ごすことが多いのもうきうきひろばの特徴です。

設立の背景には

学校週5日制が導入され、土曜日の地域における子どもの居場所づくりが課題となったことがあります。また、ほぼ同時に附属池田小事件が起こり、「不審者」という言葉や「見ず知らずの人」と話してはいけない」といったことが頻繁に言われ、防犯意識や治安への不安が高まりました。この頃です。

習い事などで放課後も多忙な子ども、同じクラスの友だちですら約束していない遊べない「他学年の子どもや地域の大人とのつながりが築きにくい社会になってきている」と森さんは言います。

そのような中、うきうきひろばのスタッフがスーパーマーケットなどで子ども達から挨拶をされたり、声をかけられたりする「ナナメの関係」にある存在となっています。



子どもがよく利用する保護者の方にお話を聞きました

私は土曜日も勤務があり、子ども2人を祖父母に預かってもらっています。うきうきひろばはスタッフの方が温かく関わってくたさるので、毎回同じ方に子どもを見てもりえるのでとてもありがたく感じています。学校では外で一人で遊ばないと言われているので、安心して遊べて、いろんな学校の友だちと仲良くなれるうきうきひろばは無くてはならない場所です。

少し早めに迎えに来られた日は、私も娘の友だちと遊んだり話をしたりします。さっきまで一緒に遊んでいた子たちも、実はうちの子でない子ばかり(笑)

勤務がない土曜日にも、子どもたちはちよとした時間を見つけて「うきうきひろば」に行っている。「と聞くほど気に入っています。

一緒に活動していただける方募集集中活動に興味がある方は、東図書館(〒209-1321)まで連絡願います。(折り紙の寄贈も受付中)

わたしの人権教育

彩都の丘学園

神原里恵さん

一人ひとりが力を発揮し、学びを深め、互いの成長を認め合う。そのような機会が教育活動の中でしっかりと保障されることが人権教育の基本であると考えます。

彩都の丘学園は、二〇一一年度に関校した小中一貫校で、校区は新しく開発されたばかりの住宅地です。どの子ども安心して学校に通い、新しい環境や人との出会いの中で自分のもつ力を存分に発揮できるようにするために、日々の授業をとおして友だちや周りの人との関係を築いていくことが重要です。そのため、子どもたちの中にあるよさをいかして授業を創ること、互いに理解し合える場を授業の中に位置づけることを大切にしています。

先日、小学一年生の国語「どうぶつと赤ちゃん」の学習計画を子どもたちと一緒に考えました。その結果、教材文を読み取った後に自分たちで『どうぶつと赤ちゃん図鑑』をつくることになりました。すると数日後、まだ読み取りを始めたばかりなのににもかかわらず、教科書と図鑑を参考に家で文章と絵をかいてきた子どもがいたので、さっそく、みんなでその作品のい

いところみつけをし、図鑑づくりにいかしたいことを考えました。友だちの作品のよさを参考にし、意欲的に図鑑づくりに取り組み、よりよいものを書こうとする子どもたちの姿から、自分の考えや意見がいかされた学習だからこそいきいきと取り組み、力を高めていけるのだと実感しました。

また、授業の中で、伝え合う活動を積み重ねています。友だちが表現したもののよさに目を向けてコメントを書く、隣の席の子とミニ発表会をする、グループで相談する、意見を述べ合うといった経験を重ねた子は、相手からの言葉を楽しみに待つようになり、自分のことをわかってくれるという安心感をもつことも、物の見方や感じ方には違いがあること、違いがあるからこそ学びが豊かになることを実感しているからです。

一人ひとりが力を発揮でき、自分や友だちのよさを認められる学級や学校文化を築いていく。そのような授業を九年間を見通して創っていくことが、人権が大切にされたよりよい社会づくりの担い手となる子どもを育てることに繋がると思っています。

司書さんのおすすめ本



『ちいさな労働者』 写真家ルイス・ハインの目から とらえた子どもたち

ラッセル・フリーマン／著
千葉茂樹／訳
あすなろ書房 1996

19世紀から20世紀の初頭にかけて、アメリカ合衆国では産業の発展とともに、工場や炭坑、農場で働く子どもたちが増え続けていました。当時、児童労働に対する明確な規律はなく、彼らは温かな家で暮らすことも、学校に通うこともできず、ただ生きるために働いていました。写真家のルイス・ハインは、劣悪な条件で働く子どもたちの実態を明らかにするために、危険を顧みず写真を撮り続けました。

中学2年生の国語の教科書(東京



書籍)に本書をもとにした「小さな労働者」という単元があります。担当教諭は授業のなかで本書から児童労働の具体的な場面を抜き出して読み、その後生徒たちは班ごとに調べ学習を行いました。自分たちで設定したテーマは「少年兵」「人身売買」「子どもの寿命」「トラフィック・チルドレン」等多岐にわたり、六中図書館からは20冊ほどの資料を提供しました。生徒たちは、同年代もしくはもっと幼い子どもたちが、現代でも過酷な環境のもとで働かされている事実と向き合い、真剣に取り組んでいたそうです。また後に産業革命の単元を学習したとき、「炭坑で働く子どもたちの図を見て、生徒たちがその原因を即座に答えていたのは、国語での学習があったからなのですね」と社会科担当教諭が語ってくれました。生徒たちにとって、それほど印象深い学びになっていたようです。

100年以上前にハインが命をかけて撮影した写真は、時代や世代を超えて、今も人びとの心に深く刻まれていくのです。

羽深希代子(第六中学校)

てんやわんやのがーやがや

by かわのひでただ

学校の庭から見える海は、春の海。やわらかいお日さまの光りを受けて、きらきらと輝いています。ゆみちゃんたちが、お昼休みの時間の中で、校庭や廊下、教室の内外で、ぎやかに走りまわっています。先生たちものんびりと、お昼のつかのまを楽しんでいるみたい。

突然、サイレンがどなり声をあげ、校内放送のスピーカーがわめきはじめました。「抜き打ちの防災訓練ですーすー大きな地震が起きましたー津波がやってきますーみなさん、あわてずに、いつも話しているように、避難してへんたさーいー」

と、へい返します。事前に知らされた訓練は、ゆみちゃんたちも、少ししたことではありますが、今日のようないきなり、突然の抜き打ち訓練は、初めてのことで、校庭にいた子どもたちは、校庭の真ん中に集まり、学校内にいた子どもたちは、大あわてで、われ先に校庭に向けて、駆け出します。

先生からのお話では、近々、大きな地震が来る予想があって、緊急放送がある、みんなは、まず校庭に集まり、それから、学校の裏山に登って、避難するとのことでした。

おおかたの子どもたちや、先生たちが校庭に集まりました。そうして人数を数えていると、学校の方から、「オーイー待ってくれーっーおいて行かないでくれーっー」

と、小さな声がありました。それは、ゆみちゃんと同じクラスのケンタ君の声でした。ゆみちゃんも、

「あ、ケンタ君のこと、忘れてたあ。」と、短く口を閉じました。ケンタ君は、車イスを使っている、介助員さんと、いつも一緒です。そして、廊下の出口から、ゆつくりと、ケンタ君と介助員さんが姿を見せました。ふたりの顔には、いつもある笑顔がありませんでした。

●そして、その後「抜き打ち防災訓練の反省会」がありました。

○ゆみちゃん、わたしもあわてていて、ケンタ君のことを忘れてしまって、悪かったわ。「メーね。つきり先生がついているものと思ってたの。」

○ケンタ君、みんなあわてていたら仕方がないんだろっけ、ボクのことを忘れないでくれよ。避難訓練のときは、ボクのことを入れておいてよな、口から、ゆつくり、しっかりと、ボクとつき合ってくれよな。

○先生いやあ、悪かった。悪かった。先生は、つきりみんながケンタ君と一緒にいるもんだと思込んでいたんだよ。

○ゆつ君、だれもあわてているんだから、仕方がないよ。次からは、ケンタ君と一緒に逃げるひとを決めておこうよ。

○ミキちゃん、やっぱり、みんなで校庭に集まってから、避難した方が安全だよな。

○イチロー君、ボク、新聞で読んだんだけど、東日本大震災のときに、校庭に集まっているうちに、間に合わなくて、たぐさんの子どもたちが、津波

に流されたんだって。だから、集まるんじゃなくて、それぞれが勝手に、裏山に登って避難した方がいいんじゃないかなあ。

○ケンタ君そんなことをすれば、ケンタ君は、どうすればいいんだよ。介助員さんひとりじゃあ、裏山に登れないよ。

●さあ、それからは、ああでもない、こつでもない、クラスの子どもたちの声が続きます。先生は、その話し合いを「三三しながら聞いていて、言ったのです。」

●「誰かに言われたことを守るだけじゃあなくて、どうしてこういふ話に合っているのか、本当の防災訓練なんだろっね。」と。

クラスの窓には、春の光がうつらうつら。

★さあ、あなたは、どう考えますか。地震のこと、津波のこと、避難訓練のこと。クラスのみんなや、先生といる話し合います。

てんやわんやのがーやがやと。
オフリ

考えてみよう